



科学の三次元空間モデルと「一人称の科学」

——武藤論文「対人援助学の方法論としての『二人称の科学』」へのコメント——

村 川 治 彦

(関西大学)

“First-Person” methods in light of a three-dimensional model of science

MURAKAWA Haruhiko

(Professor, Department of Health and Human welfare, Kansai University)

Key Words : “first-person” science, Gendlin, experiencing, reflexivity, otherness, replicability

キーワード：一人称の科学，ジェンドリン，体験過程，再帰性，他者性，再現性

武藤 (2013) は、Gendlin& Johnson (2004) による「『一人称の科学』の提唱」を検討し、その特徴が「『内容』VS『過程』という次元と『他者言及的 (other-descriptive)』VS『自己言及的 (self-reflective)』という次元の掛け合わせ」にあるとし、そのうえで後者の次元を「他者 VS 自己」と「記述的 VS 再帰的」に修正し新たな「二人称の科学」を提案した。武藤 (2013) はこの「二人称の科学」を、「臨床にかかわる援助行為」すなわち「他者にかかわりかけ、その他者からの応答を踏まえて再び他者にかかわりかけるといふ再帰的行為の連続的な過程」(202 頁) に必要な科学と位置づけている。

この武藤の三次元モデルによる科学の理解は、Gendlin& Johnson の「一人称の科学」モデルにおける問題点、特に三人称 (彼、彼女、それ) という対象化された「他者」と二人称の関係性をもつ「他者」、さらには一人称複数の私たちとしての「他者」の位置づけの曖昧さを浮かび上がらせる重要な問題提起である。しかし、武藤論文 (2016) の 3 次元の軸の内容を細かくみていくと、Gendlin& Johnson の一人称の科学における軸の理解と異なる観点が見られる。ここでは、1) 内容と過程の軸、2) 再帰的と相互作用の軸、3) 自己と他者の軸における武藤の理解と Gendlin& Johnson の理解の相違を検討し、さらにそれを踏まえ、2 - 1) 追試可能性としての再

現性の問題と 2 - 2) 武藤が Gendlin& Johnson とは異なる「一人称」研究の例としてあげている諏訪 (2015) の一人称研究を検討する。

1 - 1) 内容と過程の軸について； 「感じ」の重要性

Gendlin& Johnson (2004) では冒頭で「人の体験過程を系統的に欠落させることのない公的に認められた科学 (“a publically recognized science in which experiencing by persons (you and I) is not systematically dropped out”) の必要性を説き、これを科学の新たなモデル「一人称の科学」として整備することの必要性を呼びかけている。¹⁾ 彼らが提案する「一人称の科学」が従来の「現象に関する第三人称的概念によって構成される」三人称の科学と異なるのは、何よりもその探求において「人間の自己言及過程」が中心に置かれている点にある。この特徴を彼らは、「それは様々なプロセスのモデルであ

1) 武藤 (2017) は「Gendlin らは、その「三人称」の科学に代わるものとして「一人称」(first-person) の科学を提案した」と述べているが、Gendlin& Johnson (2004) は「我々が提唱しているのは、要素モデルへの敬意を少しも損ねることなく、別種の科学を付け加えること」「他の二つの科学に代わってではなく、それらに並んで」と、「代わるものとして」ではないと明確に述べている。

る。それは内容からプロセスへの根本的な考え方の切り替えを含む。分離された対象を分析するのではなく、様々な体験プロセス (experiential processes) を識別定義する。」²⁾と表現しているが、ここでいう体験の諸プロセス (experiential processes)こそ Gendlin が心理学者としてのキャリアに就く以前から体験過程 (experiencing) と呼んで60年以上にわたり探求してきた鍵となる概念である (三村 2015 ; 村川 2016)。

Gendlin は心理学者となる以前に哲学の修士課程で Dilthey 哲学を研究するなかで、Experiencing という用語を初めて使用し次のように表現している。「ディルタイ哲学において、Erleben は『過程ないしは働き (the process or function)』をさすので experiencing と訳す。一方 Erlebnis は『単位となった体験 (a unit experience)』をさすのだというのである」(田中 2004 による Gendlin 1950 からの引用)。³⁾このようにジェンドリンにとって「過程」としての体験と「単位」となった体験 (武藤でいう「内容」という区分は彼の研究経歴における中心テーマである。

それでは、体験を単位によって内容として捉えるのと、過程として捉えることの違いは具体的にどこにあるのか。ジェンドリンは修士課程修了後にロジャースのもとで心理療法における効果測定に携わった。そこで明らかになったのは、セラピーの Outcome を左右するのは、セラピストが何をするかやクライアントが何を語るかではなく、クライアントが自らの感じに注目する仕方である、という点であった。クライアントは「曖昧で述べるのが難しい内的な体験の全体性に耳を傾けたりそれを感じていた」(Gendlin 1962) のだが、Gendlin & Johnson (2004) の一人称の科学が探求の対象としている体験過程においてもこの「内的な体験の全体性を感じる」ことが強調されており、それが体験を過程として捉えるか内容として捉えるかの違いにつながる重要な点である。

しかし問題は、体験内容の場合、それを理解する際にわたしたちは概念によって枠付けすることができ、体験過程は「感じる」ことができても言葉や概念で表現することができないことである。しかし、Gendlin の独自性は、概念、言語、構造、単位による理解だけが私たちの理解でないことを発見した点にあった (Gendlin 1962)。確かに体験過程そのものは漠とした曖昧な感じとしてしか把握できず、そのままでは匿名的で暗示的である。しかし、体験過程の「感じ」は常に曖昧で漠然としたままではない。「感じの流れ (a flow of feeling)」として捉えられる体験過程はそれ自身形式論理とは異なる独自の秩序であると同時に、シンボルに応答する機能がある (Gendlin 1962 ; 1997)。⁴⁾言い換えれば、私たちの体験過程は、概念や形式や言葉で捉えることができる以上の暗在性の秩序 (the implicit) を含んでおり、そうした「暗黙の秩序」がシンボルと介して応答するあり方を Gendlin (1962) は詳細に検討してきた。

具体的な例で示してみよう。例えばわたしが論文を書いたり詩を創作しているところを思い起こすとよい。締め切りが過ぎているのに、自分が述べたいことに対して適切な表現が見つからず苦心したり、詩の最後の一節をあれやこれやと呻吟しながら推敲する。そうした苦心や推敲の過程で、必死に考えた文章や選んだ言葉が自分の求めているものでは (まだ) ないことをわたしたちはからだで「感じ」ている。そして、呻吟しながらついにぴったりくる文章が浮かんだ時、わたしたちの「違う」という感じがとけ、「ぴったり」という感じへと進展する。重要なのは、特定の文章や言葉が自分が求めていたものであることを告げてくれるのは、この「ぴったり」という「感じ」であるという点である。この「感じ」を与えてくれるものこそ Gendlin のいう暗在性の秩序であり、暗在性の秩序との応答によって体験過程を三人称とは異なるアプローチで探求できるとする点こそが「一人称の科学」の重要な特徴なのである。⁵⁾

2) Gendlin & Johnson (2004) は村里忠之氏による邦訳が末武他 (2016) の巻末に掲載されている。この論文における引用はすべて、村里氏の訳を参照しながら筆者が邦訳したものである。

3) 田中 (2004) は「この訳し分けの部分こそ、ジェンドリンが「experiencing (体験過程)」という用語を初めて使った箇所である」と指摘している。

4) 形式論理と異なる秩序についてはアブダクションに注目する必要がある (村川 2012)。

5) 「自然は反応の客観性を持った反応する秩序である Nature is a responsive order with responsive objectivity」(Gendlin & Johnson 2004) という言葉が

Gendlin は体験過程のてがかりとしての「感じ」をフェルトセンス (FELT SENSE) と呼び、誰でもがこの応答的秩序を活用できるアプローチとしてフォーカシングを開発した。⁶⁾ 武藤(2013)は「フォーカシングにおける『体験的』とは身体的という意味に近い」としているが、この「身体的」はもちろん触覚や内受容感覚、内臓感覚、あるいは怒りや悲しみ、喜びなどの情動 (emotion) のどれかに還元されるものではない。それはたんなる身体的感覚ではなく思考を含め人間がなすあらゆる行為において、その行為の最中に起きている「内的な体験の全体性を感じる」行為であり Gendlin (1957) は最初期の論文でそれを次のように述べている。⁷⁾

私は考えを思考し、人々や物事を観察し、特定の情感を感じる。どんな特定のことが起こっていても、私は自分自身の内に感じられた行為や感じられたプロセスを指し示すことができるが、それらは私がある感じを抱いたり、考えを思考したり、感覚を知覚したり、会話のテーマに注意を向けるなどする際に常に含まれているものだ。(322 頁)

この「感じ」をてがかりに「暗在性の秩序」と応答するという理解は、二人称の科学における 3 項随伴性の特徴として武藤 (2013) があげている「恣意性」の解釈にもあてはまるだろう。武藤は 3 つの項を用いて現象を記述する場合、「何を記述するかは人によってさまざまでよい」としているが、これは現象があらかじめ定められた概念や形式以上のものを含

示すように、一人称の科学では三人称の科学が前提としてきた単位モデル (概念、形式、言葉) とは異なる応答的秩序を前提としている (Gendlin1997)。を参照。この応答的秩序に基づくジェンドリンの「新しい経験主義 A new empiricism」という言葉は William James (2004) の根本的経験論を思い起こさせる。

6) Gendlin の felt sense という用語については、三村 (2015) の第 3 章で詳細に検討されている。

7) 心理学においてこうした連続的な「感じの流れ」を最初に強調したのは William James (1890) である。Gendlin は James については全くといって良いほど言及していないが、Gendlin がシカゴ大学で哲学を学んだ Richard McKeon や彼を心理学へ導いた Carl Rogers は Dewey の下で学んでおり間接的に James や Dewey の影響を受けていることが推察される。Mark Johnson (2007) が示しているように Gendlin の哲学を James の純粹経験論の延長上に位置づけることは、一人称の科学の手続きを考えるうえで重要な手がかりになるだろう。

んでいると理解しているからであると考えられる。その場合 Gendlin の観点からいえば、「その人が、どのような立場で、どのような価値観をもち、その現象に参与しているか」という自らの状況にしっかりと浸り (分析するだけでなくそこに関わる「感じ」をとらえ)、「自分の『かかわり方の前提』をまず自己点検する」際に、自らのフェルトセンスに問いかける (点検する) ことをすればよいのである。このような理解が成り立つならば、武藤がいうように内容—過程という軸において一人称の科学と二人称の科学は同一の次元にあると考えることができるだろう。

1-2) 記述—再帰の軸について； 再帰的と相互作用の違い

Gendlin & Johnson (2004) では、一人称の科学は「人間の再帰的過程 the reflexive processes of human beings」にふさわしいものであり、「自己へと再帰する次元 a self-reflexive dimension」に基礎を置くものとされている。⁸⁾ 武藤 (2016) はこの再帰的特徴に注目し、三人称の科学と一人称の科学の違いが「記述の方向性が一方向か双方向か (対称性を有するか否か)」にあるとして、Gendlin & Johnson (2004) のモデルに「記述的か、再帰的か (descriptive or reflective) という次元」を設定した。そのうえで、「動的な過程を扱いながらも、他者を再帰的に記述していくスタンス」を想定し、「他者を動的に記述していくにもかかわらず、再帰的な特性のために、他者との『関係性 (科学者との)』が含みこまれる」ことでこの次元を「二人称」と呼んだ。

しかし、Gendlin & Johnson (2004) がいう再帰性 (reflexive) とはこのように記述—再帰という軸に設定できるものだろうか。Gendlin は再帰性が「進化の過程で付け加えられたたんなる「意識」や肉体を観察する「気づき」ではなく、有機体としての様々なプロセスに多くの特徴を付与する本質的内在的次元であり、三人称の科学の概念では姿を現すことが

8) 三村 (2015) は「ジェンドリン哲学の独自性を、この再帰性にみている」(120 頁) として Gendlin に依拠しながら詳細に論じている。

できないものである」としている。こうしたプロセスを研究するには、静的な単位や単一の全体ではなく、プロセスがプロセスに関わる必要があるとあり、そうしたプロセスの交差 (crossing) が Gendlin & Johnson (2004) がいう再帰性なのである。

一方この Gendlin & Johnson の主張する再帰的な特性について、武藤 (2013) は、「他者にかかわりかけ、その他者からの応答を踏まえて再び他者にかかわりかけるといふ再帰的行為」と述べているように、自己と他者という複数の「個人」の間の循環的な関係性を想定している。この武藤のいう再帰的行為は、Gendlin & Johnson 的な再帰性になる場合もならない場合もあると考えられる。

例えば武藤 (2013) は二人称の科学と位置づけた臨床行動分析において、「3つの項を用いて現象を記述する場合、常に、自分の『かかわり方の前提』をまず自己点検する必要がある」ことを「『再帰』的なスタンス」と呼んだ。この再帰的なスタンスは、武藤 (2016) の巡回相談員の例にあてはめると、相談員が「何をすれば、その子にとっての『手応え』を得ることができるのか」(2-3頁)ということ「自問自答する」ことである。もしこの「自問自答する」際に相談員が、児童や担任あるいは授業などの置かれた状況についての自らの「感じ」へと「自問自答」するような行為であれば、Gendlin & Johnson (2004) のいう再帰性として理解できるであろう。

しかし、もしその自問自答が「何らかの枠組みを使って問題状況を分析」あるいは「クライアントの『行動』を中心として、その前後の状況変化を整理する」ことであれば、状況やクライアントを対象化し検討する「再帰」的なスタンスは、むしろ武藤 (2016) のいう「クライアントとその人が置かれている状況との相互作用 (inter-action)」と呼んだ方が適切であろう。

このように再帰的か相互作用かという区別が生じてしまうことを考えると、武藤の提案した記述—再帰という軸は、むしろ一方向か双方向かという点に注目し、対象性—循環性とした方が適切かもしれない。この場合 Gendlin & Johnson の「一人称の科学」は、循環性が自己に折り重なるため自己再帰性とな

り、武藤の二人称の科学は、他者との循環ということと相互作用となると理解できる。

1-3) 自己と他者の軸について

武藤 (2013, 2016) は自己—他者の新たな軸を設定することで一人称の科学と異なる二人称の科学を提案したのだが、Gendlin & Johnson (2004) の冒頭にある「個人 (あなたや私) の体験過程が一貫して排除されることのない公的に承認された科学」という一文には彼らが考える一人称があくまで単数であり、一人称複数 (We) の体験過程について彼らが想定していないことがうかがわれる。彼らは個人の一人称の体験を公に共有するために一人称を「科学」として社会的に制度化することを呼びかけており、「私」の一人称の体験過程がそのままあなたやあなたたちに適用できるとは考えていない。体験過程は「私」の自我意識の根底にあり、原理的に「私」という個人を超えたプロセスである。

Gendlin は 1930 年代にナチスの全体主義体制から逃れて米国に移住してきた。そうした経験をもつ Gendlin は個人が全体に飲み込まれることの危険性を熟知しており、常に個人が自らの意志で自らの内なる体験過程に知恵を見出すことを強調してきた。前述のように、Gendlin が心理学の分野で体験過程についての研究を進めるきっかけになったのは Rogers のもとでカウンセリング研究に従事したことであったが、Gendlin は常に個人の体験過程を尊重し、Focusing においても専門職としての心理療法以上に、二人の人が対等の立場で Focuser と Listener を相互に役割交代して行う Partnership を奨励してきた。

そのため Gendlin & Johnson (2004) はあくまで一人称単数の私が自らの「感じ」である体験過程に再帰的に直接参照することを強調している。もし、この「私」が捉える体験過程からの応答をそのまま無条件に適用可能な他者がいるとすれば、それはあなた (You) ではなく私たち (We) である。一人称の科学は、あくまで単数の個人が体験過程を探求するという前提で提唱されているが、例えばインタビューなどが用いられる際には、研究者と協同研究

者が共通の経験を巡ってそれぞれの体験過程を言語を介しながら探求するような研究も想定できる。⁹⁾しかし、こうした研究は「一人称(複数)の科学」とでも呼ぶ方が適切であろう。

一方他者性について武藤(2013)は、二人称の科学における分析ユニットを使用するうえで「クライアントの『他者性』を絶えず保持しておく(つまり、相手の尊厳を守るために『相手のことを自分との『同一性』の延長線上で理解した』と安易に思わないようにする)」ことを強調している。複数の個人が(クライアントとセラピスト、援助者と被援助者等の)役割によって対等な関係ではない臨床実践の科学は確かに武藤が提起するように二人称(相互作用)の科学と捉える方が適切であろう。ただし、武藤が「二人称的かかわりの具体的な研究例」として参照している佐伯の「みんなが『お互い』を見つめ合うのではなく、『外』をとともに見つめるという関係で、はじめて本来のYOU的世界が作り出される」という他者は、武藤がいう二人称というよりは、一人称複数として理解する方が適切のように思われる。

2-1) 追試可能性としての再現性

Gendlin & Johnson (2004) は一人称単数の個人の体験過程に基づく科学を提唱しているのだが、彼らは個人の体験過程がどのように公に意味のある形で提供できると考えているのであろう。Gendlin & Johnson (2004) が指摘しているように、すでに「一人称の体験に関する多くの発見、無数の知見が存在」し「現在でも数百もの実践の手続きがあり、その多くが多くの人にとって価値がある。」問題なのは、「重要な諸変数が実践する人たちの直感に留まっており、特定化が可能であるにも関わらずそうした特定化への公的な動機付けや呼びかけは存在しない。」ことにあると彼らは考えている。つまり、一人称の知見はそれだけでは、三人称の科学のような公的な検討や修正、共有ができないことは彼らも承知しているのだ。一人称の「知見」が一人称の「科学」となるには、彼らが言うように、複数の他者によって、何らかの追試が可能でなければならない。しかし、

9) Murakawa (2002) はそうした試みの一つである。

これまでの科学の追試の手続きは三人称の科学を前提にしたものであり、体験過程を自己再帰的に探求する一人称の科学でどのように追試が可能であるかは未だ明確でない。

武藤(2016)は、この追試可能性の問題を、三人称の科学的な「再現性」という観点から理解しようとしている。しかし、武藤が主張するような「再現性」は三人称の科学が前提となっており、それを一人称や二人称など体験過程に基づく研究にあてはめると、当然のことながら「限定的で、一般性を欠いた、きわめて普遍性から遠い」ものになってしまう。一人称の科学が扱う(そして、二人称の科学も)体験過程は本質的に変化し続けるため同じ体験を再現することは原理的に不可能であり、一人称の科学の追試の手続きにおいては、再現性は追試の手続きとはなりえない。再現性によって公的な科学としての手続きを設定しようとするのは内容一過程の次元の違いを見逃していることからくる誤った判断だと考える。

「個のなかに普遍をみる」という場合、あらかじめ個的体験に何らかの要素を前提としその要素のなかで普遍的なものだけを取り出すことだと考えがちである。しかし体験過程の考え方に基づけばそれはそもそも不可能であり、むしろ体験過程が結果的に体験過程を豊かにできるかどうか、あるいは何らかの形で体験過程を推進できるかどうかには評価基準を設定すべきであろう。¹⁰⁾ 言い換えれば、経験を単位に分けそこから「異なる要素」を排除することで成立する普遍性(uni-verse; 単一の詩)ではなく、経験過程の多元性(multi-verse; 複数の詩)が進展すること(これは三人称研究の普遍をも含みこむ)へと、一人称研究の追試可能性の方法論的基準を変更しなければならないと考える。¹¹⁾

10) この独自の普遍性の原理を Gendlin (1962/1997) は IOFI (それ自身の事例 an instance of itself) と呼んでいる。詳細は、三村(2015)の第6章を参照。

11) この多元性に開かれた体験過程の探求という一人称の科学の基準については、James (2004) の「プラグマティズムの方法と純粹経験の原理による根本的経験論」(p.101) が理論的な基盤を与えてくれるだろう。

2-2) Gendlin & Johnson からみた 諏訪の「一人称の研究」

武藤が言及している諏訪 (2015) のように、1990年代以降認知科学の分野を中心に一人称の方法論への関心が高まっている。¹²⁾ しかし、そうした一人称研究の多くが三人称の「観点」と混同されがちな「一人称的視点」や「対象的記述」「普遍性 (いつでもどこでも誰にでも適用できる) による評価」などの問題を抱えている。¹³⁾

例えば諏訪 (2015) は彼が考える一人称研究について次のように述べている。

ひとは、それまでの人生背景、性格、ものの考え方に基づいて、自分の一人称視点からみえる世界状況に反応して、行動します。世界を一人称視点からどのように知覚していたのか、それに対してどう反応し、何を思ったのか、そしてどう行動したのか。そこに、そのひとの知が現れているはず。そのひとの人生背景、性格、ものの考え方という個別具体性を捨て置かず、そのひとの一人称視点からみえる世界を記述したデータと、そのひとの主観的な意識のデータをもとに、知の姿についての先見的な仮説を立てる研究がいま必要であると感じています。わたしにとって、一人称研究とはそういう考え方の研究です。(iv頁)

ここで述べられている「一人称視点からみえる世界を記述したデータ」「そのひとの主観的な意識のデータ」というのは、主客二元論に基づき対象化された世界を内なる意識に映し出すというアプローチであり、「一人称視点で観察・記述する対象のモノゴトとは。。。要は、自分のからだや意識と、環境のあいだに生じるインタラクション (相互作用) を記述する」(3-4頁) のように、環境との相互作用を付加しているとはいえ、19世紀内観主義心理学と基本的な構図は変わっていない。この諏訪のスタンス (さらには Neuringer の「自己実験」) は武藤の三次元空間でいうと、自己—内容—記述の次元であり、三人称の科学と自己—他者の軸でのみ異なるだけで、研

究対象を外的物理世界から内的意識世界に移し替えただけである。

諏訪 (2015) が挙げているサッカーの例をみると彼の「一人称的視点」に欠けている点が明らかになる。諏訪はコーチが三人称視点で全体視野を有しているのに対し、選手は「原理的には180度の視野以外はみえていません」という。そして選手の「動的反応力を担う知を議論するには、局所視野ではあっても選手Aのみ視点で知を記述する以外に方法はありません」と述べている。しかし、ある程度スポーツ経験のある人なら後ろ側や見えていないスペースにパスを送ることが可能であることを知っている。選手の動きはある視点などではなく、フィールドにおけるからだの感じであり諏訪がいう「自分のからだに環境とのあいだにどのような相互作用を起しているか」そのものである。

また諏訪は「他者と対話すること」、特に「自分のことをよく理解してくれる二人称的な親しいひと (You 的な存在) との対話が、一人称的な観察・記述を促してくれる」として、一人称研究が二人称研究を含むと述べているが、ここでいう他者の条件として必要なのは「理解してくれる親しい人」という二人称的存在ではなく、むしろ同じサッカーやスポーツを経験し共通の経験を探求できる We 的他者であるだろう。

このように諏訪が示す一人称研究の枠組みは一見 Gendlin & Johnson とは異なるが、実際に一人称研究を推進していくうえで諏訪は「面白いと感じることや「自分のからだに素直になってからだの声を聴くこと」を強調している。このように「感じ」をてがかりにしているのは、実践的に諏訪は体験内容よりも体験過程を扱っていると考えられる。また諏訪が重要だと述べている3つのモード「①からだによる実践から、からだの動きや体感を表現することばを外的表象化する②ことばがことばを生む (連想や推論が働く) ③新たに生まれた言葉でからだを制御する / 新たに生まれたことばの観点で、身体動作や体感を再認識してみる」(24-25頁) は、武藤でいう自己—過程—再帰の一人称の科学の次元にあてはまり、Gendlin & Johnson と共通する地盤にいるようにも考えられる。

12) 例えば、Varela & Shear (1999) Petitmengen (2009) 野村 (1999; 2014) などがあげられる。

13) 認知科学の分野における一人称研究に対する批判としては Gendlin, E.T. (2009) を参照

人工知能研究において一人称研究の必要を説いている諏訪らは、主に「リアルな現場における動的対応力」を本質とする「状況依存性や身体性を有する知」の探究をすすめている。一方 Gendlin はそうした身体知よりもむしろ人間にとっての体験過程と「意味」の関係を探求してきた。こうした違いがあるとはいえ、「個々の一人称研究を、同時代/後世の研究者が自分の〈からだで学ぶ〉こと」、あるいは「多様な一人称研究が提示する知の姿を、研究者が自分のからだというただ一つのフィルターを通して理解することにより、複数の一人称研究の統括的な全体像を「味わう」(42頁)という諏訪の「仮説」は、一人称の「知見」を一人称の「科学」へと進めようとする Gendlin & Johnson (2004) の提唱に共振しているものだと考える。

参考文献

- Gendlin, E.T. (1957). A descriptive introduction to experiencing. *Counseling Center Discussion Papers*, 3 (25). Chicago: University of Chicago Library (8 pp.).
- Gendlin, E.T. (1962). Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective. New York: Free Press of Glencoe
- Gendlin, E.T. (1991). Thinking beyond patterns: body, language and situations. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The presence of feeling in thought*, pp. 25-151. New York: Peter Lang.
- Gendlin, E.T. (1997). The responsive order: A new empiricism. *Man and World*, 30 (3), 383-411.
- Gendlin, E.T. (2009). What First and Third Person Processes Really Are. *Journal of Consciousness Studies* 16. 10-12: 332-62.
- Gendlin, E. T., & Johnson, D. H. (2004). Proposal for an international group for a first person science. New York: The Focusing Institute
- James, William (1890). *The Principles of Psychology* Volume Two New York: Dover Publication.
- James, William (2004). *純粹経験の哲学* 伊藤邦武 (編訳) 岩波書店
- Johnson, Mark (2007). *The Meaning of the Body: Aesthetics of Human Understanding*. Chicago: The University of Chicago Press
- 三村 尚彦 (2015). 体験を問いつける哲学 第1巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論 京都: 特定非営利活動法人 ratik.
- 武藤 崇 (2013). 臨床行動分析と ACT: 「二人称」の科学とその実際. *臨床心理学*, 13, 202-205.
- 武藤 崇 (2017). 対人援助学の方法論としての「二人称」の科学
- Murakawa, H. (2002) *Phenomenology of the Experience of Qigong: A Preliminary Research Design for the Intentional Bodily Practices*. Ph.D Dissertation submitted to the California Institute of Integral Studies.
- 村川 治彦 (2012). 経験を記述するための言語と論理—身体論からみた質的研究
看護研究 45, (4), (増刊号) 324-336, 医学書院.
- 村川 治彦 (2016). 主観性と一人称の科学—生きる身体とプロセスとしての知 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之 (編) 「主観性を科学化する」質的研究法入門 (33-44頁) 金子書房.
- 野村 幸正 (1999). 臨床認知科学—個人的知識を超えて 関西大学出版会
- 野村 幸正 (2014). 個人科学としての心理学—分析から自証へ 関西大学出版会
- 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之 (編) (2016) 「主観性を科学化する」質的研究法入門 金子書房
- 諏訪 正樹 (2015). 一人称研究だからこそ見出せる知の本質. 人工知能学会 (監修) 諏訪正樹・堀浩一 (編) 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- 田中 秀男 (2004). ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究 (上) 図書館の譜: 明治大学図書館紀要 8, 56-81.
- 田中 秀男 (2004). ジェンドリンの初期体験過程に関する文献研究 (下) 図書館の譜: 明治大学図書館紀要 9, 58-87.
- Petitmengin, Claire (Eds.). (2009). *Ten Years of Viewing from Within: The Legacy of Francisco Varela*. New York: Imprint Academic.
- Varela, Francisco & Shearer, Jonathan (Eds.). (1999). *The View from Within: First-person Approaches to the Study of Consciousness*. New York: Imprint Academic.

(2016. 11. 18 受理)

(ホームページ掲載 2017年5月)